

# 海獣人

カリブ海の捕鯨事情⑤

## ベグウェイ島

セントビンセント・グレナディーン(SVG)のベグウェイ島で、ここ最近、捕鯨船の4頭すべて獲れたのは2013年のみ。14年は3頭、17年が1頭、19年は3頭、21年は1頭、昨年からは0頭、今年3月は1頭というように、毎年コンスタントにベグウェイ島を獲っているわけではない。しかし、それでもベグウェイ島の捕鯨文化は脈々と継承されていくと感じた。

1頭がもたらす価値は全く商業的なものでなかったことが理解できた。たかが1頭、されど1頭、毎年1頭でも獲り続けることに意義があるのだ。

ベグウェイ島への短い訪問で、彼らの捕鯨を直接見たり、鯨肉を口にできなかったのは残念だったが、これまで彼らの捕鯨文化を共有していないよき者として、これからは世界におけるさまざまな形の捕鯨に敬意をもち、改めて人類と鯨類の関係性に向き合っていきたいと思った。

SVGには、ベグウェイ島の先住民生存捕鯨だけではなく、ほかにも主にゴビ



骨が残されているバルワイイーの浜

# 捕鯨文化脈々と継承

よりベグウェイ島民たちがクジラの骨に任んでいるのだという噂らしいアイアンティアイをもち、クジラという存在が人々の生活に受け込んでいた。

サトウクジラ捕鯨によって島民は盛り上がり、共同体に一体感をもたらし、精神的な充足感を生み出す。

レゴンドウクジラを獲っている集落バルワイイーがセントビンセント島の西側にある。首都キングスタウンから北西に車で35分で、人口は約5000人である。獲ってきたゴビレゴンドウクジラを茹で解体し、塩漬

けにして、日干しにする。頭骨などの骨は浜辺にそのままにされていた。ホエールワオッチング

われる女性も迷いもなく中国語で私に話し掛け、誰かをし始めた。間もなく、そ

し始めている。17年に、ホエールワオッチングではな



「チング」になつてしまった最悪なケースが起きてしまつたが、引き続き、観光と文化継承のバランスが、SVGの国内政治の采配に求められている。(つづく)



セントビンセント島のクジラ解体(地元民のビデオからスクリーンショット)



バルワイイーで鯨肉を干すために使われている



42歳 松下政経塾 期生 松田 彩

1988年7月広島県生まれ、35歳。米国・オハイオ州立大国際関係学部卒、中国・北京大大学院哲学部中国哲学専攻。同国で12年間生活した。2021年度松下政経塾に入塾し現在在籍中。日本と中国の3か国がバランスの取れた関係を築け、平和な生活を守るために、為政者を志す。食料安全保障や難民防衛などの観点から、日本の一次産業を強化したいと考え、特に漁業振興を提議。海洋大国・日本を目指す。

の友人らも入ってきたが、彼らはカリブ29か国を2日間で周遊する同じクルーズ船に乗っていた大陸からの中国人らしい。

筆者が捕鯨の調査をしていると旅行客から聞きつけた旅行ガイドがやってきて、ホエールワオッチングを自遊プログラムに盛り込みたいと目を輝かせて詳細を聞いてきた。私は中国人でもないし、カリブに住んでいないわけでもなく、数日したら帰ることを告げると驚機にはつながらないと判断したようで、去っていった。

捕鯨国SVGも、ほかのカリブ地域と同様に、経済の大躍進を光に依存しているため、ホエールワオッチングを業用